

をひて意のふよき及よりたしり信正云
けふ湯ふよて懸湯と云ふ也(湯屋山
と号し又湯といふに疑の稱ありと云ふ詞
は猶ありて懸るを湯屋と稱す井戸屋洗
屋縫屋漆屋湯屋の類なり今浴室のこ
を湯屋と稱する也)詞は湯と云ふ事あり
辨さへーと云ふ予按するに又味葉湯あり
た人へ湯て諸病を治する事あるを
むすふに是を湯と號す鎮の国大梵字川の
川上は湯屋村といふあり古ハ温泉ありて

浴室のありたりあるて湯屋村といふ云々
や湯屋山といふけ村より出づる名や又
け村の名ハ湯屋山より出づるや今主子
細を志る人なり哉和歌集按察使資賢
免つるく沖幸を三輪の祚なり

志る有るの湯なり

とせし歌の詞出は有馬の湯は君ひて
沖幸ありたり此傳に傳ふ湯の湯祚をハ
三輪の明祚と云む中傳と云てはよき
て傳りたりとあり又味葉湯の事によ